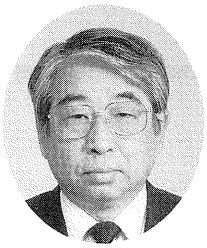

巻頭言

未だなお「安全」と「安心」のはざまで

財団法人　日本植物調節剤研究協会　理事・研究所長　**竹下孝史**

ひとつの言葉が流行語となる風潮に懸念を感じるが，最近，頻繁に活字や耳にする言葉に「安全と安心」がある。ちなみに「広辞苑」には「安全」とは安らかで危険のないこと，物事が損傷したり，危害を受けたりするおそれのないこと，また「安心」とは心配・不安がなくて心が安らぐこととある。「安らか」「安らぐ」という表現に関し，両者の言葉に共通性がありそうにも思われる。しかし「安全」とは科学的・客観的な事象を理解した上での認識であり，一方「安心」とは観念的な感覚の上に立った言葉で，この両者の言葉の意味するところは，そもそも異なった次元ではないかと思われる。つまるところは「安全だから安心」とする図式であるのだろうが，「安全」とするにはある判断が伴うことになり，その判断のためにはその種の概念・推理そして思考を可能とする学習知識がなくては成立しない。「安心」はあくまでこれらの判断に裏付けされた自己完結的な認識であろう。

平成15年に野菜供給安定基金より委託され植調協会が行ったアンケートによる「野菜作用植物成長調整剤等安全情報等調査事業」報告がある。作物生産履歴等の情報に関した調査であるが，この中で農薬の使用に関し，消費者からは農薬の総使用回数，毒性情報や残留基準値について知りたいとの要望が高い比率を占め，「安全・安心が確信できるかどうか？」や「安全であることがわかるとよい」等のコメントも寄せられている。一方，生産履歴調査が野菜価格に影響するとしたら？の設問に対し，「高くても買う」が45％，「高くなったら買わない」が37％とこの両回答間に大きな差はなく，このほか「(価格の)程度による」「一割以上高くなったら買わない」「あまり高かったら他のものにする」「価格に反映することはおかしい」といった安全と安心のバランスがちぐはぐな意見，さらには「自給自足する」「知人と自分達で作れるものは交換したい」のように農作物の生産を自己中心に考えている意見も寄せられ，消費者の意識の或る部分を垣間見る思いがしたものの，消費者は無条件の「安心」感が優先し「安心だから安全」という逆転の思考となっているのではないかとの戸惑いをも覚えた。

農薬のどのレベルまでの情報が求められているのかについて本調査では不明であるが，ともかくも農薬の毒性や残留性に対する関心度や不安感が根強いとの再認識もさせられた。

したがって「安全」判断の礎として，農薬の開発に携わっている側としては，求められる内容に応じた情報を，専門的な知識がなくても理解できる形で速やかに開示する努力が必要であり，今後も永く農薬の有効利用を持続させるためにも，消費者の理解を得る方向性を探る時期にきていることは確かではないだろうか。

「数字が独り歩きをしてしまう･･･」というようなこれまでの個別的な観念にとらわれず，多くの情報を多角的に提示することで，「数字」に対する消費者の見方も，年を重ねるにつれ，より理解が深まるものと予想される。となると現在一部で進められようとしている薬剤数の規制や使用農薬の限定といった偏った生産履歴構成の解消にも繋がるのではないか。

公益性とリスクの価値判断，農薬の「安全性」の基礎ともなる情報提示に努めるとともに，消費者側にも，提示された情報を公正・冷静な見方で修得してもらうことにより，両者が協調してゆくことの必要性については言をまたない。

ややもすると，一方的な観念に流されがちな国民性ともいわれるが，多くの情報をもとに多様な意見の集積が可能となったときに「安全」に対する認識の成立と，そして漠としたものではない「安心」に結びつくのではないだろうか。

しかし「安全と安心」は農薬論争に限るものではないところに根が深いものがある。